

「希望」に飢えた人々に明かりを



フォトジャーナリスト  
大石 芳野

「自分が紛争地のドキュメンタリーを撮るとは夢にも思わなかった」という大石芳野さん。だが、日本がまだ戦後の色濃い時代、激しさを増していくインドシナ戦争のさまをメディアから見聞きして育った彼女にとって、「戦争」は決して他人事ではなかった。

カメラのレンズを通して社会とつながっていたいという思いから写真を学び始め、そして在学中の1966年、戦争最中のベトナムを訪れる。以来、ベトナム、カンボジア、コソボ、アフガニスタン…理不尽に日常を破壊された人々の姿を記録し、伝えてきた。

「次はスーダンに行きたい」  
人間が過ちを犯し続ける限り、彼女はその悲劇から目をそらすことはない。（続きは55ページ）

## 「見てしまった以上、 見なかったことにはできない」

フォトジャーナリスト

# 大石 芳野

Oishi Yoshino

東京都出身。日本大学芸術学部写真学科卒業。ベトナム、カンボジア、コソボ、アフガニスタンなど世界各地で戦争や内乱の過酷な状況を乗り越えて生きる人々の姿を撮り続けている。2001年『ベトナム 凜と』(講談社)で第20回土門拳賞受賞。『コソボ 破壊の果てに』(講談社)、『アフガニスタン 戦禍を生きぬく』、『子ども 戦世のなかで』(藤原書店)、『コソボ 絶望の淵から明日へ』(岩波書店)など著書・写真集多数。06年3月、第57回日本放送協会放送文化賞受賞。東京工芸大学教授。



photos by Suto Naotoshi

### 暮らしを破壊する戦争

私は、伝統文化を大切にしながら、たおやかに、生き生きと暮らしている市井の人々に興味があり、いろんな地域の人々の暮らしを記録していきたいと思っていました。ところが、それができなかった。戦争や恐怖政治によって人々の生命や暮らしが脅かされている現実と直面したんです。一体これはなぜなのか、これほど暴力的に暮らしや文化を破壊してしまうことがあっていいのか、また、これは他人事ではないと感じました。だから、「破壊」の渦に巻き込まれた人々の怒りや悲しみ、それでも生きようとするたくましい姿を伝えたいと思いました。

時には、あまりにも非情な状況に、私自身が押しつぶされそうになることもあります。でも、かろうじて生き残り、愛しい人も生活も失い傷ついた人々を目の前にして、私がつぶれそうだからといって知らん顔はできません。見てしまった以上、見なかったことにはできないんです。

しかも、彼らは「希望」に飢えています。特に子どもたちは、暗闇の中でかすかな明かりが見えるとそちらに向かって走ろうとする。その希望の明かりを少しでも大きくするお手伝いが、平和な日本に暮らす私たちにできると思うし、それを多くの人に伝えたいですね。

### 一人一人に届く支援を

3月にチャドに行き、JICAの事業の現場を見ました。その地域は砂漠化の影響で土地が疲弊し、水

や樹木が枯渇しつつある非常に厳しい環境で、住民たちは苦しい生活を強いられていました。そこに、紛争が続く隣国スーダンから難民23万人が押し寄せてきたのです。住民たちは限られた畑や水を難民に分け与えるので、ますます生活が苦しくなる。でも「彼らは何も持たず命からがら逃げてきたのだから、畑ぐらい提供してもいいんだ」と言うんです。

けれども、国連から支援を受けられる難民と異なり、住民たちの困窮は増し、資源の奪い合いから争いに発展しかねません。そこで住民が自活していけるようJICAが協力しているのです。住民が安定して暮らせるようになれば、難民も含め地域全体が潤うのではないかと期待を感じます。ただ、やはりスーダンの問題が解決しなければ、チャドの問題も解決しないでしょう。JICAにはスーダンの支援にも力を入れてほしいと思います。

昨年12月、津波災害から1年後のインドネシア・アチェに行きました。日本はインドネシア政府に莫大な援助をしているにもかかわらず、アチェの復旧が進んでおらず、被災者は人間らしい生活が送れているとはとても思えません。人間の生活の基本はやはり「衣食住」です。JICAは大きな組織ゆえに小回りが利かない場合もあると思うので、一人一人の衣食住が満たされるような支援は、きめ細かい活動ができるNGOと今以上に連携を深めて行っていくのがいいと思います。そうして人間の安全保障をもっと地に足の着いた形で広げていってほしいですね。